

標準漢文法を讀んで

松尾捨次郎

松下大三郎氏が國文法の權威であることは、標準日本文法を讀まぬ者でも、少しく國語に興味を有する人は、十分承知の事である。しかし漢文に於ける造詣のいかに深いかを知つて居た人は至つて少く、標準漢文法を讀んではじめて、其の博識と卓見とに驚いた人が多からうと思ふ。自分の如きも正に其の一人である。

本書に新説の極めて多いことは、著者が其の自序に述べられた通であるが、世上の所謂新説が街學的のものが多いのに反して、本書の新説は何れも漢文法の基準説明となる者であつて、無用と見える解説も、やがて一字一句の用法になくて叶はぬ者となつて行くのは嘆稱の外はない。品詞の分類について、

名詞・動詞・副體詞・副詞・感動詞・複性詞の六品詞は……時の古今將來、宇宙の上下四方を問はず、凡そ言語と稱すべきものは、此の六品詞以外に出でることの有るべからざるものである。

といはれたのなども、一讀した所では自信に過ぎはせぬかと思はれるが、其の説明を反覆熟讀すると、如何にもと首肯される。而して此の六品詞と縱橫的に、一方に於て詞を大別して本詞・不定詞・形式詞・複性詞の五種となし、各品詞皆此の五種あるものといふのも、一寸は無用ではないかと疑はれるけれども、其の歸著する所に違すれば、それゝ必要なることが悟られる。かりに本書

の長所が理論的方面にのみあるとしても、其の價值は十分に認めねばならぬ。然るに本書は理論的方面に於て卓抜なばかりでなく、記載的方面に於ても例證が豊富であつて、且つ孫引は一つもないといふに至つては、實に感服の外はない。個々の文字の用法に就いて著しく眼に就いた説明を挙げると、

(1) 是はこれと近稱に讀んでも實は中稱であるから、此(近稱)とは用法が違ふ。是は一は前首の内容を指し、二は何でも適當な事物を指す。

此の説明によつて、はじめて

天下之人間執事之於愈如是也必皆曰執事之好士如此執事之待士以禮如此⁽²⁾

などがよく分ると思ふ。

(2) 者は事物の概念の形式的意義を表はす名詞である。

と説いて更に十種の用法を細説して居るのは、やゝ煩に過ぎる様に思はれるが、よく考へると、漢文を讀む上にも、書く上にも、心得ておくべき事項であつて、決して煩瑣ではない。

(3) 謂云首目等の區分は必ずしも新説ではない様だが、精確な品詞の分類に立脚して居る點は出色だ。

(4) 有は他動性である點が日本語のありと違ふ。有は有⁽¹⁾有⁽²⁾有⁽³⁾といふ様に鳥⁽¹⁾岩⁽²⁾を客語として、客語に由つて自己に缺けた實質的意義を補充する。

といふ説などは、實にこれ有るかなと叫びたい。但し有⁽¹⁾有⁽²⁾有⁽³⁾を

有りて譯して古例を讀んで見ようと言はれたのは、少しく首打傾けざるを得ない。むしろ大抵の場合有すと音讀して、他動に考へてよいのではあるまいか。

子曰舉百鈞則爲有力人矣(力を有する)

子曰夷狄之有君不如諸夏之亡也(君を有する)

此等は勿論のこと次の例なども有すてよく通ずる。

海中有鱗

嶋上有岩

次の例などは有すては具合が悪い様であるが、を有りよりはよくあるまいか。

有朋自遠方來不亦樂乎(われ有すの意。此は寧ろ朋遠方より來るを有すか)

(5)如はごとしと訓ずるが漢文では依據性の形式動詞だから直譯すれば如花は花に如し(花に似る)であると。

いふ説明なども、一寸辯を好む様に思はれるが、實は此の説明があつて初めて如之といふ語の成立も分り用法も明かになる。

(6)或は副詞としての説明は聊か賛成出來ぬ。自分は

或あるひはとよむのは好ましくない意譯であつて、實は常にと信ずる。

と信ずる。

或問譚太夫陽城於愈(……問ふあり)

或謂孔子(孔子に謂ふあり又は孔子に謂ふものあり)

或百步而後止或五十步而後止

或命車中車或棹孤舟

此等皆「者あり」「事あり」又は「者を有す」「事を有す」

有すの意ではあるまいか。著者が「未能或之先を未だ之に先んずるある能はずなどと讀むのは意譯であらうと思ふ。私は或はと譯む方がよいと思ふ」と言はれたのは正に愚見と違である。

(7)敢の説明は、實に麻姑を履うて痒きを搔く様な感がある。十數年前のこと、文檢の問題に敢不行と不敢行とを區別せよといふ問題の出た時、自分は某漢學者と議論した事があつた。それは敢不行は元來行かざるを敢てす即ち不行といふことを思ひ切つてする意である。其が漢文によくある反語(形は元のまゝの)に轉じて敢て行かざらんやの意に轉じたに過ぎない。初からそんな意がある筈はない。

といふのであつたが、適當な例證を擧げ得なかつた爲に、對者を首肯させ得なかつた。然るに本書に眞の例證が適確に示されて居るのは、實に心ゆく次第である。

(8)所や所以の説明も實に精確な者である強ひて言へば

所以の以には用の意と因の意とがある。因の意の時は原因理由をさすからゆゑんと讀んでよいが、用の時は方法や方法物を指すからゆゑんと讀まぬがよい。

といふ様に説いてほしかつた。

(9)矣の用法を論じて終止的・敘述的從屬性・喚呼的の三種に區分されたのはともかくとして、終止的用法の場合をゆゑに比較して詳論されたのや、於・乎の用法に就いて從來の日本文典流乃至西洋文典流の解釋の誤謬を細論されたのなども著者の獨壇場というてよからう。

以上述べ來つた様な説明が、從來の字訣的の者とは違つて、如何にも系統だつて組織的に配述されて居るのは、他に比類が無い

と請ずる。此の長所著者の卓見を一々紹介しようとする、際限がないから、此の位で止めようと思ふが、最後に言及したいのは成分の排列論の中に

日本人は漢文の文字は顛倒してゐると思ふ。……支那人は日本語は顛倒して居ると思ふ。……しかし從屬部が前にあつて統率部が後に在るべきが、人間思想の法則（意識流）に叶ふといふ理論から言つて、漢文の客體關係の排列は逆置法である。……漢文に於ける逆置法は唯客體關係に於てだけであつて、其の餘は全部日本語と同じく順置法である。誠に簡単だ。日本人が漢文を作るに文字の顛倒が難しいなどと思ふのは、全く下らない話である。

實にさうである。さうして漢文を讀むのに、文字の顛倒が難じいなどと考へる所謂漢文廢止論者乃至漢文書トし——論者はどうもいけないと思ふ。